

さよならアンドロメダ

ももね@まゆすき p

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

<https://syosetu.org/novel/130713/> の続き
になります。

完成したら、繋げ直してその作品と統合し直そうと思いますが、出来ればこの作品をいち早く誰かに見てもらいたいので投稿する事にしました。

目次

「ねえ」 | 1

「どうしたんだい？」 | 8

「ねえ」

「ねえ。」

「どうしたんだい？」

「ねえ…どうしてプロデューサーは、プロデューサーなんですか？」

星が瞬く空の下で

どうしてだと思う？と悪戯っぽく笑った顔が好きでした。

「そんな事がわかるほど、もりくぼは賢くないんですけど…。」

「なら、乃々が理由を探してごらんよ。きっと乃々にならわかるはずだよ。」

気がついたら、いつのまにかアイドルになんかなつちやってて、毎日が充実とかきらーとかむーりいーって思ってたんですよ？

でも、プロデューサーがいたからもりくぼは頑張れたんです。

プロデューサーが大好きでしたから。

毎晩、遅くまでレッスンに付き合ってもらって、夜空を見上げて会話するのがとても好きでした。

ある時、もりくぼとプロデューサーで約束をしました。

「今度、2人で星を見よう。」

「いつも見ている空じゃなくて、もっと綺麗な場所で。」

澄んだ空気を纏いながら見る星はとても綺麗なんだよ。」

珍しく指切りげんまん、なんてして。

でも、その後あなたはすぐに居なくなってしまうました。

本当は、あなたがまゆさんを好きな事なんてバレバレでした。

最期までまゆさんの事考えてるなんて、ずるすぎます。

もりくぼの入る余地なんて最初からなかったんです。

でも、プロデューサーとした約束は

確かに、もりくぼとプロデューサーだけの約束だったんです。

プロデューサーが居なくなつたその日から、もりくぼは笑えなくなりました。

少しずつ人と目線を合わせるようにしていましたが、もりくぼは下を向きながら誰とも目を合わせなくなりました。

笑つたら、あなたの笑顔を思い出すから。

目を見たら、あなたの優しい瞳を思い出すから。

それから何年も過ぎました。

まゆさんは明らかに壊れてしまっていました。

もりくぼは机の下に引きこもつて過ごしていました。

たまに凜さんと亜季さんと輝子さんが心配そうにもりくぼに話しかけてくれましたが、もりくぼは言葉を返しませんでした。

そんなある日、

「ねえ。乃々。」

「…どうしたんですか？」

凜さんと心配そうな顔をしている亜季さんが机の下を覗き込む形で、私に話しかけてきました。

「そろそろ、そこから出て来なよ。」

「いやですッ!!!!」

即答でした。

自分でもどこから出てきたのかわからないくらい大きな声でした。

「凜さんには、大好きな人がいきなり居なくなってしまう私の気持ちなんてわかりません！」

凜さんなんて…大っ嫌いです！」

大っ嫌いなんで事、本当はありませんでした。

どうしてここまで酷い事が言えたのでしょうか。

「…そっか。ごめんね。」

もう、話しかけないでいるね…と弱々しい声で、ほんの少し震えた声で去っていきま
した。

「それで本当によかったのでしょうか…?」

亜季さんはそう言って、どこかへ行きました。

きっとそのときから私は本当にひとりぼっちになってしまったのでしょうか。

また月日が過ぎました。

なんとなく眠れなくて、星が見たくなつて起き上がった時に声が聞こえたんです。聞こえないはずの、あの声が聞こえたんです。

「こんばんは。」

「えっ…。」

目をこんなに見開いたのは久しぶりでした。

頬をつねつても痛くて、これはきつと現実なのだと。

「ぶ、ぶろでゅーきー…？」

「どうしたんだい？」

くすくすと笑いながらそこには大好きだった人が立っていたんです。

「どうして…？」

どうして?としか言えない私に彼はいいました。

「君はなんで泣いているの?」

言われてはじめて、目からぼろぼろと雫が落ちているのに気が付きました。

「だって…ぷろでゅーさーは…もうここにいないじゃないですか…。いないはずじゃないですか…。」

それなのにどうしてもりくぼのそばにいるんですか!!! 今までののはドッキリだったんですかそういうのは本当に嫌いですけどおお!!!」

鼻水も涙もぼろぼろ零しながら、私はプロデューサーを見つめました。

「いや、俺もびっくりしてんだわ。」

きよんとした顔で、もりくぼを見つめるプロデューサーの顔は絶対忘れません。

「でもよかったよ。」

安心したようにほうつと息を吐き出して、もりくぼに言います。

「あのさ、俺との約束覚えてる？」

「どうしたんだい？」

「あのさ、俺との約束覚えてる？」

忘れてるはずなんてないじゃないですか。

「星を、一緒に見に行ってくれるんですか？」

プロデューサーは嬉しそうに微笑んで頷きました。

「よかった。」

その約束を忘れないでいてくれて。」

その時の顔は、

哀しそうで、でもとても嬉しそうで、

少し切ない顔でした。

「さ、行こっか。」

「え……ど、どこに？」

プロデューサーは、決まってるでしょう？と笑って言いました。

「星を見に行くんだよ。」

約束を果たそう。」

「え……？」

もりくぼの手をそっと握って、引っ張ってくれます。

そして、手がすぐ離れました。

そういえば、もりくぼが机の下からなかなか出てこなかった時もこうやって手を握って引っ張りあげてくれましたっけ。

「どんな星を見ようか。」

「ペガサス座……とか……？」

秋の星で、1番好きな星の名前は上げずに2番目に好きな星の名前を言ってみました。

「へえ、乃々ならアンドロメダ座と思ってた。」

なんでこういう時だけ勘が鋭いのでしょうか。

「うう…。そりゃ、もりくぼの好み的にはアンドロメダ座が1番好きですけど…。」

「そうだよなあ！なんてたつて逸話がとても乃々好みだもんな。」

にこにこ笑いながら、プロデューサーは私の手をもう一度握ります。

「ペガスス座も、アンドロメダ座も秋の四辺形だ。」

つまりは、乃々は自分の見たい星の近くの星の名前を言つて本当に見たい星を隠そうとしたわけだ。」

「凶星すぎます…。」

「ご、ごめんなさい…。」

「乃々はおちやめさんだなあ。」

次は正直に見たいものを言つてくれよ？とでこぴんした後に、

「ただ、今日星を見るにはちよつと準備が整つてないからさ。」

だから、また来週この時間に窓の外を見てごらん。」

そう言つてプロデューサーは消えました。

「え…。」

消えてしまったのです。

さつきまで繋いでいた手の温もりが少しずつなくなっていく、プロデューサーがもりくぼのそばにいた痕跡すらなくなってしまうました。

「…きつと夢を見てたんですよ。」

誰も居ない空間に私は一人話しかけます。

「夢でプロデューサーに会えたんです…」

涙がぼたぼたと落ちて、服に星座を描いていきます。

「ねえ どうしてプロデューサーは死んじゃったんですか…？」

この夜の事は受け入れたくない現実が見せた、「森久保乃々が望む世界の夢」として忘れようと思いました。

「うふふ…、今日のお弁当はハンバーグですよお。」

事務所に行くと、まゆさんはプロデューサーの机の上にお弁当を置くところでした。

「あら？ 乃々ちゃん、おはようございます♪」

にこやかな笑顔で私を見つめるまゆさん。

その目には私もありくぼも映っていません。

ただ、亡くなってしまったプロデューサーの事しか見ようとしていないんです。

「プロデューサーさん、今日も会えないかもしれないんですって…。」

まゆ、早くプロデューサーさんに会いたいです。」

「そう…ですね。」

どこか嬉しそうにスキップするまゆさんとお別れします

今日も机の下に引きこもる私。

「な、なあ…キノコ食べるか…？」

輝子さんがえのき茸を差し出してくれます。

「ベーコンとほうれん草と一緒に炒めて食べるもよし…鍋にいれてもよし…ば、万能食材…だぞ。」

「あ…ありがとうございます…。」

輝子さんが少し驚いた顔で言います。

「ぼののちゃんが…!!!喋った!!!」

「いや、もりくぼだつて喋りますけど…。」

その騒ぎを聞きつけた凜さんがこちらに來ます。

「乃々っ!!」

そのまま抱きしめられて、ひたすらに

「乃々…乃々っ。」

「り、凜さん…く…苦しいい…。」

ぎゅーぎゅー抱きしめられました。

「あ…ごめ…乃々が人の顔を見て、話してるのを見ていたらつい…。」

そう言われて私は気づきます。

何年振りでしょう。

こうして人の顔を見て、触れ合つて、話すのは。

そして、またぼろぼろと涙がこぼれます。

そうだ、言わなきゃいけない事があるんです。

「り、凜さん…。」

大嫌いななんて言つてごめんなさ…ごめんなさい!!

酷い事言つて、突き放してごめんなさい…。」

凜さんが優しく頭を撫でて私に言います。

「いいんだよ。乃々。」

私は乃々とまた話せるだけで充分。」

そつともりくぼの涙を拭つて、笑いかけてくれました。

「ねえ、乃々。」

「どうしたんですか？」

「ううん、呼んでみただけ。」

「…ねえ、凜さん。」

「どうしたの？」

「もりくぼも呼んだだけです。」

顔を見合わせて、2人で笑います。

「うんうん、よかったでありますよ…。」

亜季さんはそんな私たちを見て嬉しそうに笑います。

あの夜のことは夢だったんでしょか。

ふと、そう考えます。

約束した日は明日にまで近づきました。

「もし、明日プロデューサーが来なかったら…??」

きつともりくぼはまたダメくぼになってしまおうでしょう。